

3 2回の大腸穿孔で手術を行った1例

篠川 主・黒崎 亮・佐藤 巖
南部郷総合病院外科

大腸穿孔を二度発症し手術した症例を経験したので報告する。

症例は78歳，女性。

【主訴】腹痛，嘔吐。

【既往歴】58歳：直腸腺種で直腸部分切除。71歳：急性心筋梗塞で冠動脈バイパス移植。74歳：直腸穿孔でHartmann手術。術後腸閉塞症で4回の入院。78歳：頰椎性頰髄症，右大腿骨頸部骨折で入院。

【現病歴】平成17年5月夕食後腹痛，嘔吐あり翌朝当院救急外来を受診し腸閉塞の診断で入院となった。

【入院時血液検査所見】白血球：14700/mm³，CRP：0mg/dl

【入院後経過】入院直後にイレウス管を留意し一旦症状は改善したが約1ヶ月後人工肛門直下大腸穿孔を発症し，穿孔部の縫合閉鎖とドレナージを行い軽快した。

【結語】2回の大腸穿孔手術では多数の塊状の硬便を結腸内に認め，これが穿孔に関連したと考えられる。特発性・宿便性症例は術後も注意を要する病態である。

4 経皮的ラジオ波焼灼療法による結腸穿孔の1例

野村 達也・土屋 嘉昭・梨本 篤
藪崎 裕・瀧井 康公・中川 悟
佐藤 信昭・神林智寿子・田中 乙雄
県立がんセンター外科

HCCに対するRFA後に発症した結腸穿孔の1例を経験したので報告する。

症例は80歳，男性。

既往歴：68歳時に胆嚢結石症で腹腔鏡下胆嚢摘出術。

現病例：C型慢性肝炎で当院通院中，2006年2月に肝S5のHCCに対して経皮的RFA施行。同年10月のCTにて肝S5にHCCの再発を認め，

11月に再度RFA目的に入院し経皮的RFA施行した。翌日から発熱出現し抗生剤投与開始となり症状は軽快したが，7病日に腹痛出現し，CTにて腹水，free air認め汎発性腹膜炎の診断で緊急手術施行した。肝彎曲部結腸が胆嚢摘出後の胆嚢床に癒着しておりRFA施行部に連続していた。胆嚢床から結腸を剥離すると結腸の穿孔部位が明らかとなり，右半結腸切除術を施行した。肝臓に隣接する臓器にはRFAからの熱が伝わりやすく，肝表に近い部位に対するRFAにおいては隣接臓器の熱損傷を避ける注意が必要である。

5 当院における大腸穿孔性腹膜炎の検討

渡辺 直純・岡村 拓磨・林 達彦
村山 裕一・清水 武昭

村上総合病院外科

過去10年間に当院で手術を施行した大腸穿孔性腹膜炎28例について検討した。平均年齢は72.8歳，男性16例，女性12例。原因としては癌関連7例，便秘5例，憩室2例，巨大結腸症2例，ヘルニア嵌頓，外傷，虚血，結腸捻転症各1例，医原性8例であった。穿孔部位はS状結腸～直腸22例，横行結腸3例，右側結腸3例であった。発症から手術までの時間は手術死亡した症例も含め概ね10時間以内であった。術式はハルトマン手術と，病変部の切除吻合または縫合閉鎖し，一時的人工肛門を造設するものが20例と多かった。術後PMXを施行したのは4例，呼吸器管理を要した症例は9例。手術死亡は5例あり，そのうち急性期を脱した後の他病死が3例で腹膜炎による直接死亡は2例(7.1%)であった。直接死亡をなくすために更なる検討が必要と思われる。

6 大腸穿孔症例の検討

丸田 智章・三浦 宏平・田島 陽介
萬羽 尚子・塚原 明弘・小山俊太郎
田中 典生・武田 信夫・下田 聡

県立新発田病院外科

大腸穿孔の手術症例について検討した。

【対象】2001年6月から2007年12月までに大腸穿孔に対し手術を施行した50症例（男女比27：23，平均年齢70.8歳（33～98））。

【方法】年齢，性別，穿孔原因，基礎疾患の有無，術前経過時間，SIRS，術式，穿孔部位，限局性腹膜炎か汎発性か，術後合併症の有無により検討した。

【結果】穿孔原因は大腸癌に伴うもの13例，憩室炎29例，その他8例で穿孔部位は右側結腸13例，左側結腸および直腸37例だった。死亡率は20.0%だった。SIRS（ $p < 0.05$ ），限局性腹膜炎か汎発性か（ $p < 0.05$ ），術後合併症の有無（ $p < 0.01$ ）に有意差が認められた。またSIRSの24例中20例（83.3%）が汎発性腹膜炎で，死亡率は33.3%だった。

【結論】大腸穿孔し汎発性腹膜炎となった症例は予後不良だった。

7 当院における大腸穿孔性腹膜炎症例の検討

富山 武美・齋藤 義之・藤野 正義
厚生連豊栄病院外科

1997年1月1日から2007年12月31日までの11年間に当院で経験した。大腸穿孔性腹膜炎は17例であった。医原性の穿孔が7例あり，原発性の穿孔は10例であった。平均年齢はおのおの62歳，77歳であった。入院後24時間以内に手術が行われたが，術死例は3例あり，いずれも原発例であった。術死例を除く術後入院期間は医原性55日原発例は72日であった。医原性としては大腸内視鏡の粘膜切除時の他，内視鏡操作そのもの，用指のブジーによる物があつた。原発性は悪性腫瘍の閉塞に伴う穿孔と憩室による穿孔がはい半ばした。

8 当科における大腸穿孔性腹膜炎の検討

岩谷 昭・高橋 聡・島田 能史
小林 康雄・須田 和敬・丸山 聡
谷 達夫・飯合 恒夫・島山 勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】大腸穿孔は細菌性腹膜炎から多臓器不

全に陥り，依然救命が困難な症例も少なくない。今回，当院における大腸穿孔症例の臨床的検討を行った。

【対象】1994年1月から2007年12月までで，当院で手術を施行した大腸穿孔症例40例について検討した。

【結果】平均年齢は64.4歳で，穿孔部位はS状結腸が最も多く，術前のCT検査では88%に腹腔内遊離ガス像を認めた。穿孔原因は医原性が最も多く，他には悪性腫瘍，憩室炎，虚血性，炎症性腸疾患の順に多かった。術式は，病変部切除及び人工肛門造設が最も多く施行されていた。術死症例は6例認め，術死症例は，術前白血球数が $3500/\mu\text{l}$ 以下，発症より手術まで12時間以上要した症例が有意に多かった。

【結論】大腸穿孔症例は，早期診断及び早期治療が重要と思われた。重症化が予想される症例では，より積極的な集学的治療が必要と思われた。

9 当科での大腸穿孔性腹膜炎症例の検討

関根 和彦・小林 和明・寺島 哲郎
長谷川 潤・島影 尚弘・岡村 直孝
内田 克之・田島 健三

長岡赤十字病院

【目的】当科における大腸穿孔性腹膜炎手術症例の経過，臨床的特徴について検討した。

【対象】2003年から2007年までの虫垂穿孔を除く大腸穿孔性腹膜炎33例。

【結果】男13例，女20例，平均年齢は67.0歳。糖尿病，高血圧などの基礎疾患は11例に認められ，ステロイド剤を内服している例も4例認められた。穿孔原因は悪性腫瘍が最も多く（11例），他に医原性（大腸内視鏡，洗腸），虚血性，異物（魚骨），憩室炎であった。穿孔部位は左側（下行結腸2例，S状結腸11例，直腸11例）に多く，82%は術前CTで腹腔内遊離ガス像を認めた。術式ではHartmann手術が最も多く施行され（16例），術後死亡例は1例のみであった。平均入院日数は45.7日（最大345日）であり，50日以上長期入院例8例では半数の4例に敗血症/DIC